



# 物理学 B 第 11 回

## 磁性体と変位電流

濱本 雄治<sup>1</sup>

情報工学部 情報通信工学科

2025 年 12 月 10 日、12 月 15 日

---

<sup>1</sup>hamamoto@c.oka-pu.ac.jp

# 前回の復習



- ▶ 磁束密度  $B$  の内部の電流素片  $I\Delta s$  に作用する力

$$\Delta \mathbf{F} = I\Delta \mathbf{s} \times \mathbf{B} \quad (\text{アンペールの力})$$

- ▶ 電場  $E$ 、磁束密度  $B$  の内部で運動する粒子に作用する力

$$\mathbf{F} = q(\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B}) \quad (\text{ローレンツ力})$$

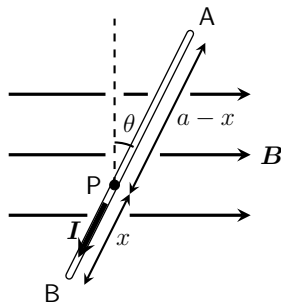
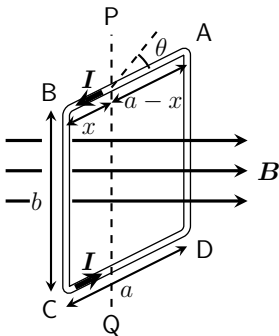
- ▶ 電磁場中で運動する荷電粒子に関するニュートン方程式

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = q(\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B})$$

## 前回の小テストの解説



一様磁場  $B$  中に置かれた横の長さ  $a$ 、縦の長さ  $b$  の長方形コイル ABCD が、辺 BC から距離  $x$  ( $0 < x < a$ ) だけ離れた軸 PQ の周りに回転できるようになっている。このコイルに下図の定常電流が流れているとき、コイルに作用する力のモーメントを求めよ。



## 前回の小テストの解説 (続き)



辺 BC に作用する力のモーメント

$$N_{BC} = IBb \sin \theta \times x$$

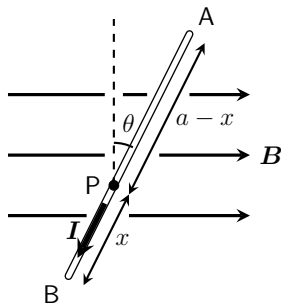
辺 DA に作用する力のモーメント

$$N_{DA} = IBb \sin \theta \times (a - x)$$

コイル全体に作用する力のモーメント

$$N = N_{BC} + N_{DA} = IBab \sin \theta$$

$x$  は任意なので  $N$  は軸 PQ の位置に依らない



# 分子電流

▶ 磁性の起源は微小な円形電流 (分子電流)

▷ 分子電流が  $z$  軸上に作る磁束密度

$$B(z) = \frac{\mu_0 I a^2}{2(z^2 + a^2)^{3/2}} \simeq \frac{\mu_0 I a^2}{2z^3} \quad (z \gg a)$$

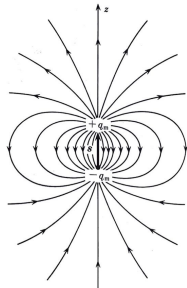
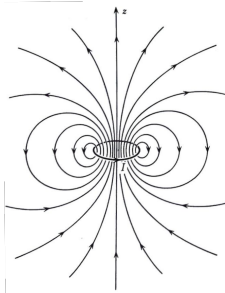
ここで  $a$  は分子電流の半径

▷ 磁気双極子が  $z$  軸上に作る磁束密度

$$\begin{aligned} B(z) &= \frac{q_m}{4\pi} \left[ \frac{1}{(z - s/2)^2} - \frac{1}{(z + s/2)^2} \right] \\ &\simeq \frac{q_m s}{2\pi z^3} \quad (z \gg s) \end{aligned}$$

ここで  $s$  は双極子の長さ

$\pi\mu_0 I a^2 = q_m s$  のとき分子電流と磁気双極子が作る磁場は同じ



# 磁化電流



## ▶ ドーナツ形の鉄芯を持つソレノイド

## ▶ 電流 $I_e$ を流す前

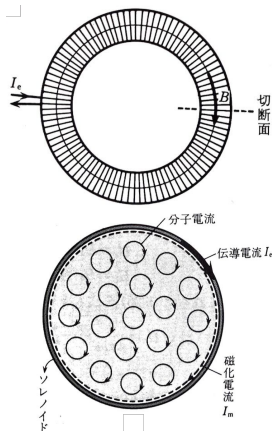
- ▷ 鉄内部の分子電流の方向は乱雑
- ▷ 分子電流の平均はゼロ

## ▶ 電流 $I_e$ を流した後

- ▷ 磁場  $B$  で鉄内部の分子電流の軸が揃う
- ▷ 内部の隣接した分子電流は相殺
- ▷ 表面の分子電流を**磁化電流  $I_m$**  と呼ぶ

## ▶ 鉄芯の効果

- ▷ 伝導電流  $I_e$  に加えて磁化電流  $I_m$  も磁束密度を生じる
- ▷ ソレノイドの内部が中空のときと比較して約1万倍の磁束密度



# 物質中の磁場



- ▶ 物質中の磁束密度は伝導電流  $I_e$  と磁化電流  $I_m$  の寄与の和
- ▶ アンペールの法則の修正

$$\int_{C_0} \mathbf{B} \cdot d\mathbf{s} = \mu_0(I_e + I_m)$$

- ▶ 磁化電流  $I_m$  が作る磁束密度を磁化ベクトル  $\mathbf{J}$  と呼ぶ

$$\int_{C_0} \mathbf{J} \cdot d\mathbf{s} = \mu_0 I_m$$

磁化を生じる物質を磁性体と呼ぶ

- ▶ 物質の応答を除いたアンペールの法則

$$\int_{C_0} (\mathbf{B} - \mathbf{J}) \cdot d\mathbf{s} = \mu_0 I_e$$

# 真空中の磁場 $H$



- ▶ 物質の応答を除いた真空中の磁場として磁場の強さ  $H$  を導入

$$\mu_0 \mathbf{H} \equiv \mathbf{B} - \mathbf{J}$$

- ▶ 物質中でも成立するアンペールの法則

$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = I_e$$

- ▷  $I_e$  は  $C_0$  で囲まれる曲面を貫く伝導電流 (磁化電流は含まない)
- ▷  $H$  の単位は A/m
- ▶ 物質中でも磁束線はループ状なのでガウスの法則は成立

$$\int_{S_0} B_n dS = 0 \quad (\mathbf{B} \equiv \mu_0 \mathbf{H} + \mathbf{J})$$



# 物質中の静電磁場の基本法則



	静電場	静磁場
力線の発生源	真電荷 $Q_e$ が存在	磁荷 $Q_m$ は不在
面積分に関する法則	ガウスの法則 $\int_{S_0} D_n dS = Q_e$	ガウスの法則 $\int_{S_0} B_n dS = 0$
線積分に関する法則	(名無しの法則) $\int_{C_0} \mathbf{E} \cdot d\mathbf{s} = 0$	アンペールの法則 $\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = I_e$
物質の応答	$\mathbf{D} = \varepsilon_0 \mathbf{E} + \mathbf{P}$	$\mathbf{B} = \varepsilon_0 \mathbf{H} + \mathbf{J}$

- ▷  $\mathbf{E}, \mathbf{H}$  は物質の応答 (分極  $\mathbf{P}$ 、磁化  $\mathbf{J}$ ) を含まない
- ▷  $\mathbf{D}, \mathbf{B}$  は物質の応答を含む
- ▷  $Q_e, I_e$  は物質の応答 (分極電荷  $\rho_p$ 、磁化電流  $I_m$ ) を含まない

# 磁性体の性質



- ▶ 多くの場合、磁化は磁場に比例

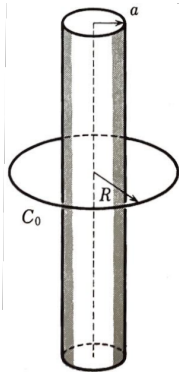
$$\mathbf{J} \simeq \chi_m \mathbf{H} \quad (\chi_m \text{を磁化率と呼ぶ})$$

- ▷ 常磁性体:  $0 < \chi_m / \mu_0 \ll 1$
  - ▷ 強磁性体:  $\chi_m / \mu_0 \gg 1$
  - ▷ 反磁性体:  $\chi_m / \mu_0 < 0$
- ▶ このとき磁束密度も磁場に比例

$$\begin{aligned} \mathbf{B} &\equiv \mu_0 \mathbf{H} + \mathbf{J} \\ &\simeq (\mu_0 + \chi_m) \mathbf{H} \\ &\equiv \mu \mathbf{H} \quad (\mu \equiv \mu_0 + \chi_m \text{を透磁率と呼ぶ}) \end{aligned}$$

## 例: 円柱状の磁性体を流れる電流が作る磁場

- ▶ 透磁率  $\mu$ 、半径  $a$  の円柱状磁性体
- ▶ 定常かつ一様な伝導電流  $I_e$
- ▶ 軸上の点を中心とし、軸に垂直な半径  $R$  の円周  $C_0$  にアンペールの法則を適用すると



$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = 2\pi R H(R) = \begin{cases} \left(\frac{R}{a}\right)^2 I_e & (R < a) \\ I_e & (R > a) \end{cases}$$

$$\therefore H(R) = \begin{cases} \frac{I_e R}{2\pi a^2} & (R < a) \\ \frac{I_e}{2\pi R} & (R > a) \end{cases}, \quad B(R) = \begin{cases} \frac{\mu I_e R}{2\pi a^2} & (R < a) \\ \frac{\mu_0 I_e}{2\pi R} & (R > a) \end{cases}$$



# 時間的に変動する電磁場

- ▶ 静的な (時間的に変動しない) 電磁場に関するガウスの法則

$$\int_{S_0} D_n dS = Q_e, \quad \int_{S_0} B_n dS = 0$$

- ▶  $S_0$  内の電荷が時間的に変化すれば、 $S_0$  を貫く電束線も変動

$$\int_{S_0} \mathbf{D}_n(t) dS = Q_e(t) \quad (S_0 \text{ 上の電束線の総和は電荷に比例})$$

- ▶  $S_0$  を貫く磁束線が変動しても、ループ状であることは不変

$$\int_{S_0} \mathbf{B}_n(t) dS = 0 \quad (S_0 \text{ 上の磁束線の出入りは相殺})$$

時間的に変動する電磁場に対してもガウスの法則はそのまま成立



線積分に関する法則は修正が必要

# 電荷保存則

- ▶ 電流が時間的に変化しないとき

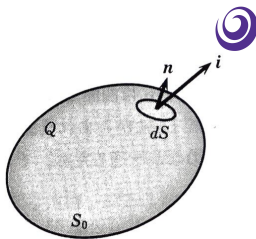
$$\int_{S_0} i_n dS = 0 \quad (\text{定常電流の保存則})$$

- ▶  $S_0$  を貫く電流の流入量と流出量は相殺し、 $S_0$  内の電荷は一定

- ▶ 電流が時間的に変化するとき

$$\int_{S_0} i_n(t) dS = -\frac{dQ(t)}{dt} \quad (\text{定常電流の保存則})$$

- ▶  $S_0$  を貫く電流の流入量と流出量が相殺せず、 $S_0$  内の電荷が変化
- ▶ 電流密度  $i$  は単位時間当りに単位面積を通過する電荷量で定義



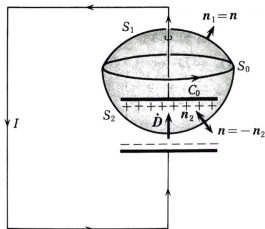
# 変位電流



- ▶ コンデンサーの正極と負極をつなぐ
- ▶ 閉曲線  $C_0$  に関するアンペールの法則

▷ 電流  $I$  が貫く曲面  $S_1$  に注目すると

$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = \int_{S_1} i_{n_1} dS = I$$



▷ 電流が流れない極板間の曲面  $S_2$  に注目すると

$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = \int_{S_2} i_{n_2} dS = 0 \quad (\text{上式と矛盾!})$$

▷ 矛盾を回避するために  $S_2$  では次式を仮定

$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = \frac{d}{dt} \int_{S_2} D_{n_2} dS$$

右辺を**変位電流**と呼ぶ

# 変位電流の計算



▶ 変位電流が  $I$  に等しいことの確認

$$\frac{d}{dt} \int_{S_2} D_{n_2} dS$$

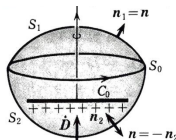
$$= \frac{d}{dt} \left[ \int_{S_2} D_{n_2} dS - \int_{S_1} D_{n_1} dS \right]$$

$$= -\frac{d}{dt} \left[ \int_{S_2} D_n dS + \int_{S_1} D_n dS \right]$$

$$= -\frac{d}{dt} \int_{S_0} D_n dS$$

$$= -\frac{dQ}{dt}$$

$$= I$$



( $\because S_1$  上で  $D = 0$ )

( $\because S_2$  上で  $\mathbf{n} = -\mathbf{n}_2$ )

( $\because S_0 = S_1 + S_2$ )

( $\because$  ガウスの法則)

( $\because$  電流保存則)

# アンペール・マクスウェルの法則



## ▶ 微分と積分の順序の入れ替え

$$\begin{aligned} & \frac{d}{dt} \int_S D_n(x, y, z, t) dS \\ &= \frac{\partial}{\partial t} \int_S D_n(x, y, z, t) dS \quad (\because \text{積分 } \int \cdots dS \text{ は } t \text{ のみの関数}) \\ &= \int_S \frac{\partial D_n(x, y, z, t)}{\partial t} dS \quad (\text{時間 } t \text{ のみの偏微分}) \end{aligned}$$

## ▶ 一般に伝導電流と変位電流が曲面 $S$ を貫くとき

$$\int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{s} = \int_S \left( i_n + \frac{\partial D_n}{\partial t} \right) dS$$



電圧  $V(t) = V_0 \sin \omega t$  が印加されているとき極板間の電束密度は

$$D = \varepsilon E = \varepsilon \frac{V}{d} = \frac{\varepsilon V_0}{d} \sin \omega t$$

極板間の変位電流は

$$\frac{d}{dt} \int_S D_n dS = \frac{d}{dt} DS = \omega \varepsilon \frac{S}{d} V_0 \cos \omega t = \omega C V_0 \cos \omega t$$

極板上の電荷  $Q = CV$  の時間変化は

$$\frac{dQ}{dt} = C \frac{dV}{dt} = \omega C V_0 \cos \omega t$$

よって変位電流はコンデンサーから流出する電流に等しい